

# 橋本義夫の学習論研究

## —「ふだん記」を対象に—

川原健太郎

キーワード：「ふだん記」、橋本義夫、書く実践、学習論、社会教育史、メディア

**【要旨】** 本論文は庶民が自由に文章を書き、出版する運動である「ふだん記」（ふだんぎ）の創始者として知られる橋本義夫（はしもとよしお、1902年-1985年）に関する研究である。橋本は東京都八王子市域に位置する川口村（現八王子市）出身である。橋本が自身の経験から着想した「ふだん記」は全国に広がり、現在もおお日本の各地で活動が行われている。本論文ではこうした書く実践「ふだん記」を生んだ橋本の理念を学習論として解き明かすことを目的とする。

本研究は学習者が容易に学べるように支えるための学習論を「ふだん記」から見出すことを試みるものである。「ふだん記」は書くことは難しいという先入観に対抗し、平明に万人に文章を書くように説いた文章執筆・出版の実践であり、誰もが学べることを是とする橋本義夫の学習論は、まさに生涯学習の原点となる理念に通じるものと推察される。そのため、橋本を取り上げる本研究は学習者の学びを支援する意味を持つものであると思われる。しかし、これまで橋本は社会教育・生涯教育の側面から取り上げられることは必ずしも多くなく、「忘れられた教育実践家」ともいえる状態にあった。

本研究では橋本義夫が文章執筆やグループの作り方などを論じた「ふだん記」の指南書等に記されたさまざまな言説を取り上げ分析を行った。そこでは「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「新人優先」、「その土地よかれ、その人よかれ」などの鍵概念を見出すことができた。さらに、その鍵概念を元に「万人教育主義」、「易行道主義」、「平等主義」、「地域主義」の学習論の具体的な諸相を見出した。

橋本の学習論は、誰でも書けると訴えかけることで、自らのことを書こうとする「未だ表出されざる潜在意識」を呼び起こし学習者の自己教育をエンパワーメントできる可能性があると思われる。

### はじめに

本論文は庶民が自由に文章を書き、出版する運動である「ふだん記」（ふだんぎ）の創始者として知られる橋本義夫（はしもとよしお、1902年-1985年）に関する研究である。橋本は東京都八王子市域に位置する川口村（現八王子市）出身である。橋本が自身の経験から着想した「ふだん記」は全国に広がり、現在もおお日本の各地で活動が行われている。本論文ではこうした書く実践「ふだん記」を生んだ橋本の理念を学習論として解き明かすことを目的とする。

書くことをテーマにする実践は、戦後、折々に行われてきた。例えば1950年代からの生活記録運動を挙げることができる。生活記録運動は、1950年代に盛んになった職場や労働組合、青年・女性の団体や学級、小集団・サークルなどで日常生活や自分のことを書きあい話し合う活動であり、日本の学習史上に果たした意義は大きい<sup>1</sup>。「ふだん記」もこうした実践と同様さまざまなことを書く実践であるが、特に自らの来歴を中心とした自分史を書く実践であり、「ふだん記」

は橋本の発したさまざまな言葉や「ふだん記」の実践によって書き手に内在すると思われる書く事を望む要求を支えてきた。「ふだん記」主に書き手自身の歩んできた来歴を書くが、そこにはとどまらず、詩やエッセイなど、庶民の中に内在するさまざまな言葉が書かれてきた。いわば人々の持つ、書きたいと思う要求が「ふだん記」の中に込められてきた。

人々の要求ということに関しては、「要求以前のものが、要求となる過程こそが、問題意識の創出過程であり、教育活動の原点である」とする言説がある。要求創出は表層的に出るものだけではなく、「未だ表現されざる意識」を解明し、表出部と照らし合わせる事が重要であるという指摘である<sup>2</sup>。「ふだん記」には「下手に書きなさい」と訴えかけることによって、内在する要求が書く実践の形で表出されたものであり、その考えをまとめることは学習者の自己教育を支える方法のあり方に示唆を与えうる意義を持つ可能性があると思われる。

さて、既存の社会教育の学習論研究においては多方面からの蓄積があるが、ここでは紙幅の関係もあり「ふだん記」で主に書かれている内容である学習者の歴史とそれに係る学びを中心に論じる。なお日本の成人の学習論として、三輪建二は1970年代からの成人発達研究、1980年代からのアンドラゴジーをめぐる理論の展開、1980年代後半からのポスト・アンドロゴジーなどの3つの潮流を示している<sup>3</sup>。この流れを受け近年では日本社会教育学会における2001年秋から2003年にかけてプロジェクト研究「成人の学習」およびその成果を踏まえた年報第48集『成人の学習』（2004年）がある。そこでは「成人の学習論の諸相」、「学習プロセス・方法の革新」、「学習支援者・専門職の力量形成」、「学習する組織の展開」で構成されているが<sup>4</sup>、近年注目を集めるライフ・ヒストリーに関わる研究、すなわち自らの歴史を振り返る学習がこの社会教育の学習論研究にも取り入れられている研究が見られる。成人の学習論に関して、ブルックフィールド、メジロー、クラントンらの「意識変容」を念頭に置いた上で、長期のスパンの中で分析を行った研究<sup>5</sup>、さらに20代から30代のヤングアダルトを対象のライフ・ヒストリー分析による学習論の意義をみいだした研究<sup>6</sup>などがそれである。これらからみえるように、成人の「意識変容」志向の学習に関する議論の深化や、ヤングアダルトの自立に向けた歩みの分析など、ライフ・ヒストリーが学習者の学びを深める可能性が模索されてきた。

社会教育研究の中でこれらのライフ・ヒストリーに関する研究が行われてきたことに関する意義は、一つに新たな成人の学習方法を拡大・深化させたことであり、もう一つが人々が記したライフ・ヒストリーそのものが学ぶ題材として価値があることを示したことである。しかしながら、これまでの社会教育におけるライフ・ヒストリーに関する研究では、ライフ・ヒストリーの価値そのものへの言及がされている一方で、書き手がライフ・ヒストリーを書き始められるに至るまでの過程は明らかにされることは少なかった。そこで、本研究は書き手がライフ・ヒストリーを書き出せるようになるまでに導く過程を解き明かすことに着目したのである。

そこで学習者が容易に学べるように支える学習論を「ふだん記」から見出すことを試みたいと考えた。「ふだん記」は書くことは難しいという先入観に対抗し、平明に万人に文章を書くように説いた文章執筆・出版の実践であり、誰もが学べることを是とする橋本義夫の学習論は、まさに誰もが生涯にわたって学び続ける生涯学習の原点となる理念に通じるものと推察される。そのため、橋本を取り上げる本研究は学習者の学びを支援する意味を持つものであると思われる。し

かし、これまで橋本は社会教育・生涯教育の側面から取り上げられることは必ずしも多くなく、「忘れられた教育実践家」ともいえる状態にあった。

そこで本論文は1. 「ふだん記」の成立と平凡人の教育、2. 橋本の学習論における鍵概念、3. 橋本の学習論の検討の構成により論じる。

## 1. 「ふだん記」の成立と平凡人の教育

### (1) 橋本義夫の略歴

橋本義夫の学習論を考察する前提として、ここでは橋本の略歴を概観する。1902年生まれの橋本は1985年に83年の生涯を終えるまで、戦前・戦中・戦後の長きに亘りさまざまな実践に取り組んでいる。橋本義夫の生涯を通じた履歴に関しては、いくつかの論文や書籍などの文献によって示されている。例えば、橋本義夫の生涯を通して論じたものでは八王子の歴史家梶国男による小論などで知ることができる<sup>7</sup>。

橋本は実業学校へ通ったが、学校嫌いであったため学歴を認めないというようにも記している<sup>8</sup>。一方で橋本は社会に出て後、多様な実践に従事する。1923年頃の日曜学校での読書会や回覧誌『自然人』の発行、1927年には生活改善運動、悪臭打破運動、青年運動、農村図書館設立運動を行う。1928年には書店・揺籃社を開店させている。揺籃社は多くの書籍を有することにより知の集積場となっていたことから地域の文化センターの役割を果たしていた書店である。1937年には教育科学研究会の八王子南多摩支部に参加し教育科学運動に傾倒する。1944年には治安維持法で早稲田署に拘置される。さらに、翌1945年には書店・揺籃社が八王子空襲にて焼失する経験をする。戦後には、様々な人々の反対などにもあいなながらも、世に知られていなかった偉人などを顕彰する碑を建てる建碑運動に尽力、さらには地方文化に関する執筆活動にも従事する<sup>9</sup>。これらのさまざまな実践経験を経て橋本がたどり着いた実践が、「ふだん記」である。

参加者が自らの歴史などさまざまな文章を自由に書き、雑誌等に発表し書籍の出版を行う「ふだん記」が始まったのは1968年、機関誌である〈ふだんぎ〉1号は1968年に出版されている。始まった当初の「ふだん記」はまだ活動の進め方など定まったものではなく、試行錯誤のすえ「ふだん記」のスタイルは1973年頃に定まったという<sup>10</sup>。「ふだん記」が全国的に注目を集めることとなったのは、橋本を取り上げた色川の雑誌記事<sup>11</sup>などが契機であり、その後マスメディアなどでも取り上げられるようになった。さらに、1976年には橋本義夫の地元・八王子以外の地域に「ふだん記」の活動を行う八菅グループができ、以降全国にも広がった。

「ふだん記」が始まったのは、いわゆる高度成長期を経験した後の時代である。日本では1960年代から1970年代にかけて国民総生産はほぼ毎年のように前年度比10%以上の伸びを記録した時代でもある<sup>12</sup>。

### (2) 「ふだん記」文友の概要

「ふだん記」では、「ふだん記」の活動に参加し執筆していた人々を文友と呼ぶ。ここでは「ふだん記」文友の初期の概要に関して、小林多寿子や辻喜代司の研究を参照しつつ論じたい<sup>13</sup>。第一は執筆者の性別である。「ふだん記」初期の執筆者は、女性が多い。

橋本義夫自身は、こう語っている。「『ふだん記』、最も多くの喜びと協力のあったのは、無名の家庭主婦であった。次は無名の職人、働らく人、今迄社会で花の咲かぬ層であった。女性層と、花の咲くチャンスの無かった男性のそこから湧き上がる、喜びとエネルギーの燃え上がりを見て、第一に驚いたのは私であった」<sup>14</sup>。すなわち、抑圧されてきたエネルギーを持つ人々のためのものであったととらえているのである。

小林研究では、1968年から1970年までの機関誌〈ふだんぎ〉を、辻研究では1968年から1977年の『ふだん記本』及び『ふだん記新書』から橋本を除いた性別執筆者割合をそれぞれ調べている。〈ふだんぎ〉では、第1号は女性率が93.3%。最も女性率が低い第3号の50%であるものの、1号から17号までの女性率の平均は60.71%で女性の比率が高い<sup>15</sup>。一方『ふだん記本』と『ふだん記新書』の女性率は53.5%でやはり女性の執筆者が多いが男性も参加する運動であったと指摘されている<sup>16</sup>。

第二に年代であるが、『ふだん記本』と『ふだん記新書』に関しては90代1名、80代2名、70代9名、60代24名、50代15名、40代11名、30代5名、故人3名（不明2）であった<sup>17</sup>。中心的な執筆者は70代～60代であった。第三は執筆者の地域性であるが、当初は八王子の執筆者が占める割合が高かったが、徐々に比率が下がり、地域的に広がってきた（〈ふだんぎ〉1号で86.7%。以下4号は85.7%、6号85.7%、8-12号77.6%、16号54.5%）<sup>18</sup>。なお女性の執筆者に関しては、職業では主婦業を含む者が圧倒的なこと、学歴では小学校卒（高等科、高等小学校、裁縫学校含む）、青年学校・中学校（新制）・高校（同）が多数を占めつつも、大学や師範学校等など広範に渡るため一概に学歴が低いとは言いきれないとの指摘がある<sup>19</sup>。比率からみても主婦などの女性が主な担い手であったが、女性も偏った層に限ったことはなく、学歴の多様性や男性の文友も含まれることがみえるから、女性の学びが中心となりつつもそこに限らず他の層も含まれており、橋本義夫のいう万人のための書く運動の性格がここからもみえる。

### (3) 「ふだん記」の言葉にみえる橋本の理念

橋本の学習論の基盤となる理念の探求のため、「ふだん記」の言葉に込められた意味をここではとりあげたい。以下に橋本の言葉の一つを取り上げる。

「『ふだんぎ』がほんとうの姿とも云えるでしょう。『よそゆき』は芝居がかったものが少なくないでしょう。勿論『よそゆき』は必要ですが、『ふだんぎ』は其何十倍も大切です。『ふだんぎ』は生活そのものだからです。ここに『ふだんぎ』と云ったのは、着物ばかりでなく、生活のすべてのシンボルを云います。『ふだん』の生活をよくし、『ふだんぎ』でつきあい、『ふだんぎ』で話し、『ふだんぎ』でものを書きましょう。（中略）なるべくひらがなを元にし、ごちゃごちゃした漢字を少なくする。手紙から文まで何でもよい。みんなの言葉、みんなの字、ペン、鉛筆、なんで書いてもよい<sup>20</sup>」。

これは橋本義夫が「ふだん記」を始める前の1958年頃の言葉である。「ふだん記」は「ふだん着」の言葉に通じる意味があることであり、「ふだん」で書くようにすべきであると橋本義夫は論じている。「ふだん」こそが大切な意味を持ち、生活そのものであり、文章においても「ふだん」の姿で書くべきとしていたのである。その後、文章の書き方を論じた『平凡人の文章』（1960年）

などを経て、徐々に「ふだん記」の型がみえてくる。「ふだん記」運動の中で出されている主な出版物のうち機関誌の〈ふだんぎ〉(1968年1月創刊)に橋本義夫の考え方が示されている。「みんなが文章を書く習慣をつける目的。できるだけ新人優先。劣等感をもたせぬ為、競技はさける。楽しく書き、楽しく読む様心掛けている。問合せや原稿送り先は、グループの人なら誰でもいい<sup>21</sup>」とする言葉には新人優先、劣等感をもたせぬなど「ふだん記」における根幹となるキーワードが含まれている。つまり、「ふだん記」は誰もが入れるよう開かれたものであるべきで、機関誌〈ふだんぎ〉はより多くの人に門戸を開き、参加者が書くことの力を伸ばすことも意識されて出版されていたのだらうと推察できる。

橋本義夫の誰でも文は書けるとする考え方は、『ふだん記案内一万人の書く文・出せる本一』(ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年)の巻頭言の「私でも書けるんだから、書けない者はない<sup>22</sup>」という言葉からもみることができる。文章が万人のものであることを意識していた橋本義夫の視座がここに示されている。

なお万人のものという視点は書かれる文章だけでなく、本を出版することにも向けられていた。「ふだん記」では、文章を機関誌〈ふだんぎ〉に掲載し、さらにそれぞれが書いた文章をまとめて、単行本の形で出版する『ふだん記本』が出される。新書や単行本など形態はさまざまであるが、万人のものという視点でそれぞれが本を出せることにも目が向けられていた。「ふだん記」初期の1970年代に出されていたふだん記新書の巻末の刊行説明で橋本はこう述べる。

『「ふだん記」は「万人の文章」「万人自身の言論」を目標として来たが、この大きな情勢下には地平線に出るべき時であろう。この事情を受けて『新書』を刊行することにした。グループ及多くの人々の協力を待つ<sup>23</sup>』。文章は限られた人のものではないとする橋本の考えがここにも表されており、万人の言葉が文章となり本として世間に出るべきであるとする意志を伺い知ることができる。劣等感に悩んできたという「平凡人」が書く実践を続ける中で着想した、万人に書かせようとする「ふだん記」運動は、万人及びその文章が尊重されるべきとの考えを一貫して投げかけており、万人が書くことのできる実践の底の一つを成していたのであらうと思われる。

なお、本の出版の方法に関して橋本は、商業出版、官庁出版、個人自費出版などの出版方法とは異なる「ふだん記」的グループ出版を提起し、グループの人々や地域の印刷所との協力を得ることにより作り手に負担の少ない方法での出版を推奨していた<sup>24</sup>。誰でもできるように負担を減らそうとする「ふだん記」の理念がここからも読み取れる。一方で出版、刊行し「地平線に出る」ことに際しては、グループ以外にも広くさまざまな読者に対するアプローチが必要であるように思われるが、書き手が自由に書く「ふだん記」の文章がどのようにグループ以外の読者層に受け止められていくかという受容過程は出版に関する言及の中でみることはできなかったことも言及しておきたい。

#### (4) 「ふだん記」の出発に際しての橋本の言説

次に「ふだん記」がどのように出発したかを橋本義夫の言葉を中心にとらえることを試みる。ここでは橋本義夫が「ふだん記」を始めるに至った経緯をみたい。

橋本義夫が「ふだん記」を始める前に、地域文化運動に携わり雑誌の投稿などを通じて相当に



多くの文章の執筆を積み重ねてきたことは橋本の概略で述べたとおりであるが、「ふだん記」の創始は橋本自身の著書、『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』（講談社現代新書、1978年）において記されている。家庭の主婦に文章を書くことを進めて歩いているなかで、主婦の作文である『多摩婦人文集』をきっかけに書く運動を始めたことがきっかけと語られており、さらに「ふだん記」をおこした重要人物である主婦の四宮さつきの存在を示している<sup>25</sup>。

「ふだん記」は橋本の個人的な経験からはじまり、書くことに関する橋本のコンセプトに対する協力者を得ることで具体的な活動へとつながる経緯を出発点としていた。「ふだん記」は橋本義夫という稀代の実践家あってこそその運動ではあるが、橋本一人の力だけで実践に至った運動ではなく、四宮さつきのような協力者の存在を得て始められたことも重要な事実である。このような過程できた運動であることから、「ふだん記」が共感の広がりによって支えられている運動であることが伺え、橋本がこれから「ふだん記」のあり方をどのようにすべきかの着想を得る上での基盤の一つとなったことと推測できる。

機関誌〈ふだんぎ〉は1968（昭和43）年1月に、主婦によるガリ版刷りのわら半紙で初めて発行されたものである。橋本は〈ふだんぎ〉の当初に関して、「これが続くなどと思う人はだれ一人いない。だから表紙に番号さえもなかった。そんな機関紙でも『発刊のことば』だけは立派だった<sup>26</sup>」と述べる。

不格好で小規模の雑誌で、橋本は続くとは思わなかったといいながらも、橋本義夫は『発刊のことば』が立派だったと自負している。「発刊の辞」をみると、「ふだん記」が続かないと思いつつも「ふだん記」に大いなる期待を持っていることが推察できる。その後「ふだん記」は全国的に運動が広がり継続されていくのは多くの人が知るところである。

その〈ふだんぎ〉「発刊の辞」にはこう記されている。

「人類の勝利の大きな原因の一つはみんなが言語をもつことであった。だがその勝利を一層決定的なものにしたのは、文字とその組合せによる文章をもつことであった。然し、この文字、文章も、長い長い間は、直接には一部の特権者や、そのための文章職人等のものであり、上意下達的存在であった。とに角、言語と文字は人類社会を今日の如く大きく発展させた。更にその能率を高めるためには、『言語が万人のものである如く、文字もまた万人のものでなければならぬ』と信じる。これが我々の道である。然し、世の多くの発表機関はいまだに過去の習慣の中に沈み、（何とか理屈をならべているが）門を閉ざしている。文字が万人のためであるためには発表機関もまた門が開いていなければならない。我々は、我々に開かれた発表機関を各方面で持つ必要がある<sup>27</sup>」。

人類はみんなが言語をもっていることや、文字と文章をもっていることが人類にとって重要なこと、さらに言語が特定の人間のものでなく、みんなのものであるとし、「言語が万人のものである如く、文字もまた万人のものでなければならぬ」ともいう。このように「ふだん記」運動の出発を力強い言葉で宣言している。橋本の視点は徹底して万人に向いていることがこのような言説から伺うことができる。

「ふだん記」の運動スタイルは展開していく中で確立していったように、開始当初は未完成のものではあったが、根幹を成す考え方に関しては機関誌〈ふだんぎ〉の創刊時に既に完成されて

いたことをここから読み取ることができる。特に、文章を書くことは万人のものであるとする考え方は、誰もが生涯にわたってあらゆるところで学び続けるという「ふだん記」運動のもつ社会教育・生涯学習の意味を考察する上でも非常に示唆を与えるものである。

例えば、社会教育に関わる領域において非常に重要なものの一つに識字があるが、〈ふだん記〉の創刊のことは、日本のように識字がある程度の浸透をみせている状況の国において、どのように学んでいくべきかに関する橋本の学びの支え方が示されているようにもみえる。つまり、言語や文字が万人のものであるために、識字に関して世の中には庶民が発表できるような場があるべきとしていたのである。このように橋本が述べていることの意味は大きい。

すなわち、「ふだん記」の根幹にあるものはただ文章を書くことだけではないのである。文字や文章は万人のもので、万人が書くことができ、発表機関が開かれているべきなど、言葉が万人のものになるとする「ふだん記」の基本的考え方がここに明言されている。

なお、橋本は発刊の辞の末尾においては、「ふだん記」は文章を書くことを繰り返すことであるとした考え方も表明している<sup>28</sup>。人間は文章を何度も書くことで、積み上げていくべきであり。この観点からみても発表機関がある事の意義は「ふだん記」に係る人間にとって非常に大きい。「ふだん記」の出発段階から既に、「ふだん記」の運動の中において行われる学習の方法は、書くことと発表することの双方を行うことであると、明確に示されていたことがわかる。

以上からみることができ「ふだん記」出発時の橋本の理念は、一貫して万人に向けられていたことを伺うことができ、「ふだん記」がのちに多くの人々に受け入れられた理由の一端をみることができた。

## 2. 橋本義夫の学習論における鍵概念

### (1) 文章執筆に関する言葉から見出される鍵概念

次に、橋本義夫の学習論における鍵概念の抽出を橋本の言説から試みたい。万人のための文章運動「ふだん記」には、その実践の性格を特長づける橋本が発した印象的な言葉が多くある。本節では、橋本義夫の述べる「ふだん記」の学習論に関して、これらの言葉を軸にして探る。

橋本は数多くの著書を残しているが、紙幅の関係もあり本節では分析に使用する史料に関しては、「ふだん記」に関する理念や考え方、さらには実践方法などを論じたいくつかの書を対象に限定した。第一は、橋本義夫が「ふだん記」を始める以前にまとめた、文章に関する理論を記した書物、①橋本義夫『平凡人の教育と文章』（地方文化資料第49集、1960年、これは教育論である『平凡人の教育』と文章論である『平凡人の文章』の合本）である。第二は、この増補版である②橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』（ふだん記草紙第1、みんなの文研究会、1960年4月初版発行、1968年4月増補再販発行）である。第三は、橋本義夫による「ふだん記」の概要をまとめた実践書である③橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本—』（ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年）である。

第四は、④橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』（ふだん記全国グループ、1978年）、第五には、⑤橋本義夫『だれもが書ける文章』（講談社現代新書、1978年）を用いる。この二冊は橋本義夫自身がこの本に関して「基本的な本<sup>29</sup>」と評価していることで、橋本義夫の「ふだん記」

の理論を概観するにあたり、ふさわしいと考えたため分析対象に取り上げた。なお、『だれもが書ける文章』は「ふだん記」が普及されるにあたって、広く読まれた書籍であり、広く市販された書籍ということから橋本の文章論がまとめられたものとしての価値があると思われる。

まず①橋本義夫『平凡人の文章』(1960年)<sup>30</sup>を取り上げる。『平凡人の文章』は「ふだん記」の原点ともいえ、橋本の基本的な考え方が読み取れる書であると思われる。目次には橋本の考える文章のあり方が端的に示されており、次のようになっている。

『平凡人の文章』目次<sup>31</sup>

- 一、妨げる者一名文、国文教師
- 二、みんなの言葉、みんなの文
- 三、これからの文章
- 四、後ろを向かないで
- 五、二、三、の注意
- 六、手紙
- 七、話し言葉、書き言葉
- 八、書かぬは下手以下
- 九、有力な手段

以下大要を記す。「一、妨げる者一名文、国文教師」では文章は難しくかつ良い文章をみることで、文章を書こうとする意欲が減ってしまうことへの警鐘を鳴らす。「二、みんなの言葉、みんなの文」では文章はどんな文章があってもよい。つまり凡人の文があってもよい事、誰でも書けるものであることを述べられている。「三、これからの文章」では文章は現在や将来に知らせるための手段であり、どう書くかではなく何を書くかを意識するべきであることが書かれている。「四、後ろを向かないで」では本文中の章題は異なった題名にあっており「四、後ろ向きではだめ」とより断定調のものになっている。ここでは、文語や難しい字を使って過去の人に恥ずかしくない文章を書くよりも、凡人の文章を書き未来の人々を意識すべきであることが書かれている。「五、二、三、の注意」は、文章を書くに当たっての指導での留意点や心構え、具体的方法として小文の積み重ねであるべきことなど2、3の注意事項が書かれている。「六、手紙」では、万人の文の基本は手紙であり、自分なりの文で手紙を書くことが大切であると述べられている。「七、話し言葉、書き言葉」では文体に関する諸問題を上げつつ、文体は時代によって変化するものでありわかりやすい方向に向かっているという。現在や将来の人にわかるよう書くべきとしている。「八、書かぬは下手以下」は上手くではなく、書くことそのものが大事であるとする。「九、有力な手段」では書くことは意見を伝える手段となることであることや、発表機関がない人は小部数で印刷をするなどで発表することをすすめている。

以上で述べた『平凡人の文章』における九つのテーマの主旨からは二つの提言を読み取ることができる。第一は文章を書くにあたって意識すべき心構えを指南したものであることである。第二は、具体的な文章の書き方に関する方法である。いずれにおいても、「平凡人の文章」執筆当時から読み取れるのは、橋本義夫の考えの根底に言葉や文章はみんなのものであり、易しい



のだととらえることがある。

次に②『みんなの文章～万人文章論』（1960年初版、1968年4月増補再販発行）を取り上げる。ここでも、比較のため目次からキーワードを探りたい。橋本義夫『みんなの文章』は基本的に章番号が附された文章に関する理念の部分と、番号なく箇条書されている具体的な書き方の技術の二つの構成により成り立っていることがわかる<sup>32</sup>。

『みんなの文章』目次<sup>33</sup>

- はじめにひとこと
- みんなの文章
- 一、妨げる者
- 二、みんなの言葉と文  
誰でも書ける
- 三、これからの文章
- 四、後ろ向きではだめ
- 五、二三の注意
- 六、手紙
- 七、話し言葉・書き言葉
- 八、書かぬは下手以下
- 九、有力な手段
  - 平凡な技術
  - 曲芸でも数学でもない
  - 先づ習慣を身につける
  - ハガキと手紙
  - 身近な事から
  - 言葉や方言
  - 韻文
  - 調味料
  - 題
  - 発表機関
  - 保存
  - 読書
  - 先生
  - その他
  - あとがき

『みんなの文章～万人教育論』は大筋において基本的な軸となる考え方は『平凡人の文章』と同一であり、そのことは目次の前半部分からもわかるが、後半に新たに特徴的な事項が追加されている。それは具体的に文章を書くための技術、手法が示されていることである。例えば、「先

づ習慣を身につける」の節では繰り返すことで文章執筆を身につけることや、「ハガキと手紙」ではハガキを沢山出すこと（具体的に先ず5本、10本出すべきと目標まで記してあり極めて具体的である）、「発表機関」では自分で発表機関を作ること、すなわち具体的にはペンフレンドをつくること、学校や職場などでの機関誌、ローカル新聞を利用することなどの投稿先をつくることを述べている。他にも、「保存」では書いた文を少しずつ保存、校正を行い文集や単行本にまとめることや、「先生」では文の上手い人ではなく万人に文章を書かせる人（橋本義夫本人がモデルと思われる）を先生にすべきであることなども書かれている。このように、「ふだん記」の実践をはじめて来た中で、「ふだん記」をモデルに、文章執筆を通じた学習論に昇華されつつあるような萌芽が見られる。橋本の唱えた文章執筆による学習論は、実践的な手法が加わることによって実効性のあるものになったようにみえる。単に文章を書くことをすすめるのではなく、実際になにをすべきか、ということも含まれたものであったことは、手紙を書くことで仲間を増やす方法を提示していることにもあらわれている。仲間の増やし方ということも含まれていることは、橋本の運動論をもみいだすことができると思われる。

## (2) 「ふだん記」運動から見出される鍵概念

さらに、実践は年数を重ね橋本の理念は③『ふだん記案内一万人の書く文・出せる本』（1976年）にまとめられる。本書は「『平凡人の文章』（一九六〇）、『みんなの文章』（一九六八）、『ふだん記について』（一九七〇）の三旧著その他を、再編集してまとめた<sup>34</sup>」ものでありふだん記の入門書としてわかりやすい本になっている。『ふだん記案内』はより「ふだん記」にフォーカスをした形になっており、より実践を踏まえて作られたものにみえる。橋本の実践を踏まえた「名文美文を手本にするな」、「回数を重ねること」や「下手に書きなさい」など具体的である。例えば、グループづくりや「ふだん記」での書き手としての高齢者、詩（「ふだん詩」）に関することなどもそうである。橋本が編集する本の余白等にも好んで書かれ簡潔にまとめられた格言のような言葉である短言や短文も示されている。橋本義夫による文の書き方、グループの作り方などに加え、「ふだん記」から得られた成果である実践までの内容がより充実しているのが『ふだん記案内』である。

さらに2年後に出された「ふだん記」の指南書、④『ふだん記の大道—その道標—』は橋本義夫は端的にその結論を示している。「先ず結論から言わして貫う。『名文美文家、国文の先生、そういうたぐいの人の言うことなど気にせず、気楽に、ハガキや文を書きだすのが最も近道、筆まめに回数を重ねれば、誰でも普通の事は普通に書ける。実行、実行<sup>35</sup>」。

文章は一部の専門家のもに限られものではなく、だれでも書けるもの、文筆の専門家のことを気にするようなことはなく、まずは書いてみようとするのが大切であるとするそれまでに橋本が述べてきた一貫した理念がこの言葉に込められている。橋本による文章の理念は一貫して誰でも書けるものというところに力点が置かれていることを読み取ることができる。この『ふだん記の大道—その道標—』は、「私でも書ける、書けない者なし」にみるような橋本の主要な理念以外にも特長的な言葉をいくつかみることができる。それが「万人可能宣言」である。人間はすごい性能をもっており万人が持っているとする、橋本が「ふだん記」発展の中で示された言葉の

一つである。

さらに、この中でその後の来るべき時代を見据えた「新人類文化」の考え方も示している。橋本義夫が好んで使ったと思われる言葉であり、橋本義夫『万人可能の哲学 附“新人類文化”』（ふだん記全国グループ刊、1976年）や橋本義夫（岡田勝美編）『「新人類文化」のすすめ』（ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ・ふだん記全国グループ、1983年）などでも、この語をタイトルに用いた書を出版していたことから伺える。新人類文化の言葉を使うに際して橋本は、『「ふだん記」はまことにささやかなこと、野暮ったい田舎のできごと、無教養な庶民の企てのようなこととして取り扱われているが、人類文化の方向、その運命の展開を実験しているつもりである<sup>36</sup>』という。「ふだん記」はさまざまな人々文章を書くことの先を見据えていることがみえ、庶民が文章を書く「ふだん記」の実践を契機としながら、庶民がこれからの文化を作るのであるとする橋本の自負をみることができる。

こうした言説からは橋本は万人に力があることを信じ、これからの時代はそのような人々が担っていくものであるのだとする期待を持っていたことが読み取れる。すなわち人間への徹底的な信頼である。橋本義夫の学習論は自分でも文章をかけるのであればだれでも書けるという着想から、具体的な実践に取り組み、そこでは多くの人々に文を書かせ、その実践で得られた結果として新しい時代の文化の担い手としての着想に行き着いたのではないと思われる。橋本の思いと実践活動が結びついて橋本の理念が補強されてきたと推察される。

さて、「ふだん記」の実践の遍路の結果、橋本義夫の理念が広く読まれるに至ったと思われる書が、⑤橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』（講談社現代新書、1978年）である<sup>37</sup>。大手の出版社から出版された新書であることから本書が他書より広く読まれていたことが伺えるが、「ふだん記」で執筆している文友の一人、小林薫も「ふだん記」の出会いは、自分の子どもが書店で『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』を購入し薦めてくれたことであつたとの記録を自身の著書である「ふだん記」本に残している<sup>38</sup>。

本節で取り上げた他の書に比べて顕著な違いが認められる箇所は、本書中にある『「自分史」を書きなさい』とする章があることである。主な内容は、地図・年表や辞書の使い方、年表を作ることなどの具体的方法と、実際に執筆された「ふだん記」を引きながら参加者がどのように「自分史」を記録しているかを紹介する箇所から成り立っている。ここで目を引くのは、内容を「自分史」の語を用いて説明している点にある。橋本が1960年に「平凡人の文章」を出した際には、「自分史」の語は用いられていなかったが、橋本の取り組みが「自分史」の語と結びついたことがみえる。「自分史」は誰しもが持つ歴史である。橋本は万人が持っている歴史の重みに着目していたことをうかがい知ることができる。

さらに橋本の学習論を考察する上で重要な理念をみることができる。それが「新人優先」の言葉である<sup>39</sup>。「ふだん記」では一人ひとりが尊重される。特に新人は大切にされ、グループが広がっていた。こうした万人を受け入れて広げていくあり方は、「ふだん記」理念の当初から万人を重んじるという意志をみることができたが、これからの書き、読み合い学び合う新しい仲間を大切にしようとする考え方がこの言葉からみることができる。

加えて「その土地よかれ、その人よかれ<sup>40</sup>」も重要と思われる言葉である。文字通り、様々な

地域、そこで暮らす人々を大切に重んじた言葉であるとみることができるが、橋本が「ふだん記」の実践を行っていく中で繰り返し唱えていた万人を重視する考え方と地方それぞれを重んじている言葉が重なっているようにみえる。

本節でみた橋本義夫の学習論の鍵概念は橋本義夫が「ふだん記」以前の文章執筆活動や「ふだん記」の活動を通じて生み出してきた、いわば生きた学習論であるようにみえる。以上本節でみた橋本自身の言葉から鍵概念を抽出し整理すると、以下にまとめられることができよう。

「私でも書ける、書けない者なし」

「下手に書きなさい」

「新人優先」

「その土地よかれ、その人よかれ」

いずれも橋本が「ふだん記」の出発時や実際の活動を行い、実践していく中で確立してきたものである。次節においては、これらを学習論として考察し、どのようなものとなりうるのかに関して論じたい。

### 3. 橋本の学習論の検討

本節においては橋本の四つの鍵概念を対象にし、学習論としてこれらを考察した場合にどのようなものとなりうるのか、順に検討を進めていき、さらにその課題を考察したい。

#### (1) 万人教育主義

第一が、「私でも書ける、書けない者なし」の言葉にみる、橋本の「万人教育主義」の理念である。橋本は文章を見ながら、学校教育のあるなしにかかわらず、橋本は文章は誰もが書けるものであるととらえていたが、そうした考えに至ったのは、決して文筆業の専門家ではない橋本が自分でも書ける、と気づいたことにある。この理念の背景を考えるためには、橋本の理念構築に影響を及ぼしていたと推察できる、橋本の学校時代などの生育歴を踏まえる必要があると思われる。例えば橋本は次のように述べる。「生来不器用者で、小学校時代から真似るより何でも験してみないと承認できない癖がつづいている。それに能力、智力とも普通以下だったので、競争すれば必ず負ける、それだから競争事は殆んどした事がない<sup>41</sup>」。さらにこのようにもいう。「小学校に入学して『国語』とか『作文』にふれたのだが、拒否反応やら疑問やらで、それから後、学校が終るまで、私の肌には合わなかった<sup>42</sup>」。これらの言説からは橋本自身が物事を試したいと考える性質であったこと、学校時代の勉強は橋本にそぐわなかったことをみることができる。橋本義夫が自身の学歴を否定していたように、学校での教育は自らの経験として重要視していなかったようにみえる。

しかしながら学校を出た後、人生の中で書く実践に取り組み、「ふだん記」を興すまで時間をかけて書く経験を積み重ねてきた。橋本は「ふだん記」以前におけるそうした自ら体験に関して、読む運動を22歳から、書く運動を55歳からはじめ、「ふだん記」が世に知られるようになったのは70代からで老人になっていたと自らを振り返る<sup>43</sup>。しかしながら、書くことに取り組んだことが早くなかった橋本はそれだからこそ「私でさえも文が書ける、書き始めたら繰返せば誰でも書

ける<sup>44</sup>」という着想を得たのであろう。この気付きは、橋本が人生を通した学びにおいて身につけたものと思われる。

橋本自身の体験を通じて文章が書けるに至った経緯から、誰もが同じようにできるのではないかと気づいた。そのため橋本は多くの人々に文章を書く事をすすめたのであろうと思われる。橋本のこの気づきが「ふだん記」を生み出したといえ、まさに橋本義夫の学習論の根本にあるのがこの「私でも書ける、書けない者なし」の考え方といえよう。ひらがなを知っていれば書けるということが根底にあり、万人が学ぶ力があるとの理念も伺える。

なお、橋本義夫の「私でも書ける、書けない者なし」に係わる言葉に、橋本が「みんなが主体<sup>45</sup>」とする言葉を残していたことから、いかに橋本が万人を重んじることを念頭に置いていたかわかる。橋本は自分でも書けるのだから文は誰にでも書けると話していたが、ここでは文章を書く人物そのものに焦点を当てた視角から、気軽に文章を書けるための心の持ち方が示されているためである。学校で勉強しているかどうかなどは関係がなく人間はみんなが主体であること、文章も文筆の専門家だけのものではなく、みんなの文章が主体なのであると論しているようであった。

まさに誰もが学べる、「万人教育主義」である。これは橋本の学習論を構成する重要な考え方といえよう。すなわち「平凡人」の自分ができたように、誰もが学べるとする教育の理念である。

## (2) 易行道主義

第二は「下手に書きなさい」の言葉にみる「易行道主義」である。橋本は、「ふだん記」の中で誰もが文章を気軽に書けるようになった、現代の社会状況を「紙があって、印刷所があって、万人が読みもし、字も書ける。本を出せる経済力がある。幸なことに、今の日本では、出版が自由である。こんな条件に恵まれたことは日本の歴史にはかつて無かった。この条件、このチャンスに、これらの条件を組合せ、それを可能にし、それを実行し、社会の慣行にまでもってゆくのが、私たちの仕事である<sup>46</sup>」と説明する。いうなれば現代は書こうと思えば、誰もが書ける環境が整っていると考えていたのである。なお、この説明がされていたのは1976年である。当時の教育の状況はどうであっただろうか。

文部省編『我が国の教育水準』をみると、全国の高等学校等への進学率は1950年に42.5%だったものが、1959年に50%を超え、1970年代には80%台に、1974年に90%となるなど大きく上昇し、「ふだん記」が始まった1960年後半頃から変貌をみせている<sup>47</sup>。こうした数字は橋本がいう条件、チャンスがあると考えていたことを裏付けている。

以下の一節は橋本が下手に書きなさいについて述べている一節である。

へた  
下手に書きなさい<sup>48</sup>

「下手に書きなさい、好きになりなさい」

みんな  
万人に文を書かせ、記録を刊行することは至難の事であった。然し紙があって、印刷所があって、万人が読みもし、字も書ける。本を出せる経済力がある。幸なことに、今の日本では、出版が自由である。こんな条件に恵まれたことは日本の歴史にはかつて無かった。

この条件、このチャンスに、これらの条件を組合せ、それを可能にし、それを実行し、社



会の慣行にまでもってゆくのが、私たちの仕事である」。

「下手に書きなさい」の言葉は、万人の文、万人の本の鍵であると橋本自身の実感を述べている。このように、書く内容を恐れずむしろ下手に書く事を勧めることでより多くの人々が文章の執筆に参加できるように説く、この橋本の考え方は人々が何か新しい運動に参加できるように促す方法論として非常に注目すべきことである。

さらに、ここで引用した一節には「好きになりなさい」と続けられていたことにも言及しておきたい。遠慮をすることもなくむしろ下手に書くべき、さらに好きになるべきとすることで取り組みやすくするようにまで目を向けていることがわかる。

橋本は取り組むための心理的障壁を下げるためにも、下手に書く事を勧めていた。書くことは決して難行ではない。易行だとするのである。こうした橋本の理念は、人々が新しい活動に平易に参加できるよう導く学習論として注目できる。遠慮をすることもなくむしろ下手に書くべき、さらに好きになるべきとして徹頭徹尾、参画の敷居を下げるようにつとめていたようにみえる。

他にも「書かぬは下手以下」との表現も橋本は折々で用いている。類する言葉として例えば橋本は、「有と無<sup>49</sup>」という題の一節も書き記している。そこでは「有るは無きに優る」が価値を決定すると考えており、自分なりの目がかまわず書いておくのを良いとし、正直に書いたものはいつでも面白いとする<sup>50</sup>。橋本が下手に書きなさい、と述べていたのは無いよりも有ることこそが重要とする考えに通じる。橋本が重んじることは文章の巧拙ではない。有か無かなのである。「ふだん記」は文章執筆の運動であり、当然ながら文章が残る事こそが重要視されるべきであるとしていたのだ。

下手に書いて良いとすることで多くの人々が文章を書けるのである。その結果もたらされたのが、多くの人の手により書き記された「ふだん記」である。書かぬば残ることはない。格式などにとらわれてしまうことなく、存在させることをなにより優先するのが橋本の学習論であることが読み取れる。さらにこのような理念で書かれた文章に対して橋本は「正直に書いたものはいつでも面白い」、と内容が興味をひくものであるとしている。なぜなら同じ物がなく他で読めないものだからという。「下手に書きなさい」という橋本の言葉は人間に対して、書く内容を問わないことやその人にしか書けない個性的な内容が面白いと伝えることによって書くことへの心理的障壁をなくし、学びに参加できるものである。まさに橋本の「易行道主義」を如実に示しているものといえよう。

一方で、正直に書くということに関しては、課題もあるように思われる。「ふだん記」は、自らの来歴などの正直話を書き、読み合う実践であるが、橋本の論は書き手に書かせるということに主眼がおかれており、読者すなわち「ふだん記」の読み手に関する言及が少ないという点である。例えば、これまで本稿で対象に取り上げた橋本が語ってきた文章執筆についての言葉の中では書き手が中心となっており、読み手の姿はあまりみられない。橋本は書き手が自由に書くことでもたらされる読み手の反応に関して、例えば「私たち人間は、数十万年の進化的財産をもっている。私たちは私たちの言葉をもっている。私たちは、それなりの生活歴を持っている。書くことは山ほどある。それを書けばよい。友だちみんなが共鳴するだろう<sup>51</sup>」と記しており、書き手

自らが持っていることを書くことは読み手に共鳴を得られるとする考えを示しているが、自らが自由闊達に書くことと読み手から共感を得ることの両立は常にできるものではなく、達成は必ずしも容易でない場合もあるように思われる。それゆえ、書いた文章が共感を得ていくためにはどうすべきかの方法は「ふだん記」の実践の過程から読み取っていく必要があると思われる。

### (3) 平等主義

第三に取り上げるのが「新人優先」とした橋本の考え方からみえる、橋本の「平等主義」である。橋本は出版活動を取り上げ、こう述べる。

「私がすすめる出版法とは『ふだん記』的グループ出版である。これは庶民に文章を書かせるから、万人に著書を出させる努力をする。グループみんなで文章を書き、本を出せるように協力する。みんなが書き、本を出せるように協力する。みんなが書き、本が出せるのだから、上手本位の競争はしない。年功主義でもない。金の順でもない。いわば新人優先である<sup>52</sup>」。

これをみるように、「新人優先」の言葉には多様な意味が込められている。競争を排し、年齢が上だから下だからといって軽重が変わることもない。ましてやお金があるかどうかでも差別されない。橋本の万人教育主義とも通じる、徹頭徹尾それぞれの人を大切にしようとする橋本義夫の姿勢をみることができる。

なお、こうした「ふだん記」での新人優先の理念は今なお現在も受け継がれている。例えば「ふだん記」の地元八王子のふだん記雲の碑グループの機関誌<ふだん記 雲の碑>ではこうした理念に則り、目次にある著者一覧の中でも初投稿者の新人を明示し、積極的に手紙を出すことを推奨している<sup>53</sup>。

橋本が新人を優先するようにしていたのは、多くの人が「ふだん記」という書く実践に参加できるようにするためである。橋本は新しい仲間となる人を積極的に受け入れ、阻害しない。まさに新人優先の言葉によって示されているのである。こうした橋本の考えから浮かび上がるのは、競争を廃する原理である。

「新人類文化」を標榜する橋本義夫は「ふだん記」運動で庶民が担い手となる新たな時代の文化の創造を志向していた。新人優先はその一つとして重んじられていたようだ。「ふだん記」から自分史を着想し、「ふだん記」を広める契機を作った色川大吉が橋本義夫に対して「ふだん記」文化は欧米のコミュニティを重んじる考え方に近いとした問いかけに対して、橋本は次のように応じている。

「ふだん記の原則と同じです。ふだん記のグループも、競争しない、差別をみとめない、新人に拍手する（新人優先）。年功序列をみとめない、劣等感をあたえない。あらゆる職業、身分の人と共に楽しむ。そういう要素を内包した文化を創りたいのです<sup>54</sup>」。こでもやはり平等主義を色濃く示し、そこに新人優先の考え方をはっきりと示している。

この着想には橋本自身の間人観が背景にあると思われる。橋本は現代において人間に差はないにもかかわらず、「暗記的な試験とか、極小の障害物を意識的につくり、人間差を無理につくる<sup>55</sup>」ことで多くの若者が劣等感を与えてしまっていることを危惧していた。すなわち、無理な競争を否定している。ここから見いだせるのは橋本義夫の「平等主義」、すなわちヒューマンイズムであ

る。学ぶ過程において橋本義夫は、他者を疎外せず平等に学びを進めることが重要であると説いているのである。

#### (4) 地域主義

第四に橋本の「その土地よかれ、その人よかれ」の言葉からみえる「地域主義」（または地方主義）に関して論じる。「ふだん記」はその理念を提唱した橋本義夫の暮らした八王子地域だけで行われているのではない。「ふだん記」には全国に活動を行っているさまざまな各地グループがある<sup>56</sup>。ふだん記の各地グループそれぞれは独立しており、中央集権的なものではない。人間と同じく、組織であるグループそれぞれも各自が尊重されているものである。

「ふだん記」の各地グループでは「逢う日話す日」と題された大会が開かれている。この会の開催に触れ、橋本はこう述べる。「『その土地よかれ、その人よかれ』が方針である。庶民自身の文化だから、中央集権をさげ、地方分権的にならねばならない。とくに、先進国がなくなった今日では、地方地方が独立的に、地方色を出し、独創を生む素地にしたい。先進国は、地方が各々に先進的な歩みをするものである<sup>57</sup>」。この言葉中に地方分権的であると謳われているように地域や地方を重視しているのが、橋本義夫の理念である。

日本でもこれまで多様な形で地域の活性化を目指す取り組みがなされてきた。例えば1970年代には「地方の時代」が叫ばれているが、それ以前からも現在もお国レベル、地域レベルなどでさまざまな取組がなされている。特に地域活性化の側面では、地域に根付いたいわゆる「草の根」のさまざまな地域文化活動による役割は、地域それぞれを盛り上げる役割を果たしてきた意味において重要であったと思われる<sup>58</sup>。

橋本は「ふだん記」以前から地域文化研究、地域の人を検証する建碑運動など地域文化に関する取り組みを行ってきたが「ふだん記」の実践を進めていくなかで各地グループの設立に対して応援をし、「その土地よかれ、その人よかれ」を標榜しながら、地域での書く実践を盛り上げてきた。橋本義夫は書き手それぞれが暮らす地域が重んじられていることを学習者にはっきりと示すためにも「その土地よかれ、その人よかれ」の言葉を使っているが、これは橋本の「地域主義」を示すものである。橋本が地域それぞれを大切にしようとした理念は、これからの地域活性化を展望する上でどのような意味を持ちうるのか、各地グループの実践等の検討が必要になると思われる。

#### まとめ

本論文は、書く実践「ふだん記」の創始者である橋本義夫の理念をまとめ、学習論として解き明かすことを試みた。以下、本研究で得られた知見を記す。

第一は「ふだん記」をめぐる橋本の学習論は、実践に基づいた極めて具体的なものであることを見出したことである。橋本義夫が「ふだん記」を着想したのは、自身のそれまでの文章を書く経験が出発点であった。さらにそこで留まったのではなく、学習論は「ふだん記」の実践の中で行われた極めて実証的な実験によって増強され、確立したことからも橋本の学習論は実践にもとづいていることがわかる。第二は、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「新

人優先]、「その土地よかれ、その人よかれ」などの鍵概念から、「万人教育主義」、「易行道主義」、「平等主義」、「地域主義」の学習論の具体的な諸相を見出したことである。橋本の学習論は、誰でも書けると訴えかけることで、自らのことを書こうとする「未だ表出されざる潜在意識」を呼び起こし学習者の自己教育をエンパワーメントできる可能性がある。一方で、書いた文章の読み手を意識することや、出版してからの読者の拡大など、書きはじめられたあとの書き出版するあり方に関しては橋本自身の詳細な説明を見出すことができなかつた点に課題があると思われる。

本論文の課題は、「ふだん記」を他の書く実践との比較研究などを通じて、橋本の学習論の意義を比較の観点から明らかにすることである。さらに、今回の分析では橋本義夫の執筆した言説のみを対象としたため、「ふだん記」運動の実践の中で蓄積されてきた多くの文友たちが執筆した文章を取り上げることができなかつた。今後は、「ふだん記」の文友が記した具体的な執筆内容を分析範囲に含め、書き手にどのような学びをもたらしていたか研究することが課題であると思われる。

## 注

- 1 片岡了、辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会50周年記念講座刊行委員会編『講座現代社会教育の理論Ⅲ 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、2004年、pp.114-116。
- 2 萩原岳信「共同体と自己教育—近代における擬似共同体の役割り—」、大槻宏樹『自己教育論の系譜と構造—近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981年、pp.91-92。
- 3 三輪建二「成人の学習—本年報のねらい—」、日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長 三輪建二）『成人の学習』東洋館出版社、2004年、pp.9-15。
- 4 日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長 三輪建二）『成人の学習』同前。
- 5 安藤耕己「成人の学習におけるライフ・ヒストリー法—学習の意味を人生に即してみる—」、日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長 三輪建二）『成人の学習』同前、pp.45-56。
- 6 小林平造「ヤングアダルトの学習とライフヒストリー」、日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長 三輪建二）『成人の学習』同前、pp.101-115。
- 7 梶国男「橋本義夫の生涯」、橋本義夫（色川大吉、梶国男、清水英雄編）『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年、pp.403-411。他に戦前の橋本を中心に論じた小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史』日本経済評論社、2002年。戦後の橋本を中心に論じた増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が残した記録』ふだん記創書24、ふだん記雲の碑グループ、2007年。などがある。
- 8 橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい—「ふだん記」のすすめ』大揚社、1984年、奥付。
- 9 梶国男「橋本義夫の生涯」前掲、pp.403-411。
- 10 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー『ふだんぎ』という空間の成立、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、p.241。
- 11 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、〈中央公論〉89(8)、中央公論社、1974年8月。
- 12 「長期経済統計」、内閣府『平成25年度 年次経済財政報告』、p.485。
- 13 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー『ふだんぎ』という空間の成立」前掲、および辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、〈京都大学生涯教育学・図書館情報学研究〉9、2010年。

- 14 橋本義夫(岡田勝美編)『「新人類文化」のすすめ』ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ、ふだん記全国グループ、1983年、p.17。
- 15 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー『ふだんぎ』という空間の成立」前掲、p. 248。より、女性率の平均値を算出した。
- 16 辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」前掲、p. 78。
- 17 辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」同前、p. 78。
- 18 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー『ふだんぎ』という空間の成立」前掲、p. 248。
- 19 辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」前掲、pp. 78-79。
- 20 これは1958年頃の橋本義夫による回覧ノートの一節であり、橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年、pp. 106-107で紹介されている。
- 21 「機関誌『ふだんぎ』」、四宮さつき著、橋本義夫編『ながれのなかに』ふだん記本15、ふだん記グループ、p. 213。
- 22 橋本義夫「誰れでも文が書ける」、橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本—』前掲、巻頭言。
- 23 「『ふだん記新書』刊行について」、海端俊子著、橋本義夫編『海は私の絵本』ふだん記新書3、ふだん記全国グループ、1974年、p. 53。
- 24 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』講談社現代新書、1978年、pp. 166-167。
- 25 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、pp. 12-13。
- 26 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、p. 13。
- 27 橋本義夫(岡田勝美編)『ふだん記文化のすすめ—宛名のない手紙—』、ふだん記旭川グループ、ふだん記全国グループ、1983年、pp. 9-10に収載。原文は1967年12月著。
- 28 同前。
- 29 橋本義夫「この本のこのために書かれた」、『「新人類文化」のすすめ』前掲、p. 3。
- 30 橋本義夫『平凡人の教育と文章』地方文化資料第49集、1960年。
- 31 橋本義夫『平凡人の教育と文章』同前、p. 2。
- 32 橋本義夫『みんなの文章—万人文章論』ふだんぎ草紙1、みんなの文研究会、1960年初版、1968年4月増補再販発行、目次。
- 33 橋本義夫『みんなの文章—万人文章論』同前、目次。
- 34 橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』前掲、p. 115。
- 35 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』ふだん記新書70、ふだん記全国グループ、1978年、序文。
- 36 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』同前、p. 148。
- 37 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、pp. 6-7。
- 38 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年、p. 163。
- 39 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、p. 166。
- 40 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』同前、p. 168。
- 41 橋本義夫「不器用の拾い物『ふだん記』運動から」、<言語生活>第375号、筑摩書房、1983年3月、p. 74。
- 42 橋本義夫「不器用の拾い物『ふだん記』運動から」同前、p. 75。
- 43 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』前掲、p. 4。
- 44 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』同前、p. 4。
- 45 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』同前、p. 138。橋本は誰しもが「主」であることを以下



の様な言葉で語っている。

「みんなが主体」

「権威」などというものは、対照物そのものである。仮に例外ありとすれば、宗教の教祖ぐらいのものであろう。客観的事実そのものが権威なのだ。今は飾りたてた「権威者」などでなく、みんなが主体なのである。文章などもそう考えると、誰でも気軽に自分の文が書ける。

- 46 橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』前掲、p. 35。
- 47 文部省編『昭和55年度 我が国の教育水準』大蔵省印刷局、1981年5月、p. 13。
- 48 橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』前掲、p. 35。
- 49 橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』同前、pp. 35-36。
- 50 橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』同前、pp. 35-36。
- 51 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、p. 131。
- 52 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』同前、p. 166。
- 53 ふだん記雲の碑グループによる機関誌、〈ふだん記 雲の碑〉は2015年8月現在で、36号（2015年6月）まで出されており、36号の目次でも「新人優先」に基づく新人への便りを推奨した形式をとっている。こうした新人を示す方法は、「ふだん記」の各地グループの様々な機関誌で見られるものである。
- 54 色川大吉『常民文化論』筑摩書房、1996年、pp. 368-369。
- 55 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ 学校暴力の原因—劣等感から解放—」、〈青年〉140号、日本青年館、1981年1月、p. 30。
- 56 「ふだん記」各地グループは、〈ふだん記 雲の碑〉36号（2015年6月発行）によれば、21グループ、北海道には北見、旭川、札幌、江別など6グループ、九州にはふだん記北九州グループがある。
- 57 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』前掲、p. 169。
- 58 例えば、荻谷剛彦編著『「地元」の文化力 地域の未来のつくりかた』河出ブックス、2014年。では、「地域の文化活動とは、伝統や歴史に根ざしながらも新しいネットワークの形成につながる試みであったり、新たな地域の文化を創り出しながら、人びとの生活に意味を与える活動だったりする。」(p. 5) と定義付け、遠野「遠野物語ファンタジー」、飯田「いいだ人形劇フェスタ」、壮瞥「昭和新山国際雪合戦」、那覇市周辺「琉球國祭り太鼓」、取手「取手アートプロジェクト」などの事例が紹介されている。

本論文は早稲田大学特定課題研究（課題番号2015-B120）の一部である。橋本義夫、「ふだん記」に関する史料の閲覧・収集に際し、橋本鋼二氏、橋本緑氏に多大なるご尽力を頂戴した。付して感謝の意を申し上げたい。

